



安心できる介護・納得できる介護保険・信頼できる制度の実現

NP0 法人 きょうと介護保険にかかわる会

発行人 梶 宏

事務所 〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町 3-20 賀陽コーポラス 809

TEL・FAX: 075-821-0688 E-mail: npokakawarukai@helen.ocn.ne.jp



<https://npokaigo.or.jp/>

参院選結果を冷静に受け止めたい

理事長 梶 宏

7月20日に行われた参院選で、与党は参院議席の過半数を制することができなかった。アメリカと中国の狭間で生き延びるためには、強い立場をもつ政権が必要だと私は思っている。しかし、強いように見えていた安倍内閣が強さを発揮したことと言えば、資金集めのパーティで裏金を作り派閥の議員の政治基盤を強くすることが第一だった。強い立場は結局のところ、防衛のためと称して、アメリカからの兵器等を大量に買い入れることを実現するという形でしか実行されていない。

日本がだんだんと格差社会になってきていることや物価高騰に追いつけない家計の現実を前にして、国民は自公政権に「ノー」を突き付けたと言える。石破首相はゴリゴリの強権政治家ではなく、健全な保守リベラルの政治家だと思っていたし、ご当人も、かつての石橋湛山首相に自分を重ねようと考えていた。が、自公政権は石破個人の善意で変えうるものではなかった。社会保障政策の一つとして私たちがかわる小さな事例ではあったが、こともあろうに、ヘルパーの基本報酬を下げるというような事実を私たちは突き付けられた。高額医療費本人負担の上限を上げるという提案はさすがに撤回されたが、消費税と社会保障の一体改革は言

葉だけが空間をさまよっている気がする。

翻って、「終末期医療」に対して限界を必要とする政策を述べる参政党がこの選挙で大きく躍進したことは見逃せない。かつて国保連が公表した事例で、「死亡された当月の医療費が1,500万円あるケースもあった」というような事例は最近見られないようだが、それでも、死亡する前に管をつけることが、日本ほど多い国はないと聞く。命はだいじであるし、だれの命も差別しないということは、優れた文化である。だが、本人の意思がないままに周囲がきれいごとを述べたり、技術の進歩を物神化してわがままを通すことが、人間的なことと言えるだろうか。

参政党が基本的な人権よりも国権に重点を置くのはファシズムに通じるように思う。そうであればなおさら、私たちが政治の主人公であることを確認して、社会保障に投じるお金も他人事ではなく、自分事として意見を交わすことの必要性を感じる。そのためにも少数与党という現実を、だれもが冷静に政治を語る機会として活用しなければいけない。選挙前の世論調査で「野党が過半数を占めたほうが良い」とする意見が多数派だったが、その中身を吟味するのは私たちの責務と考えたい。

目次

参院選結果を冷静に受け止めたい・・・・・・・・・・・・・・・・	1
半歩、前へ！ かかわる会の新しいかたち。／組織図・・・・・・・・	2
7月研修会の報告「長年福祉行政に携わって思うこと」・・・・・・・・	3～4
6月研修会の報告「介護保険の25年を振り返る」・・・・・・・・	4～5
介護保険トピックス／すこやかアンケート項目の改善を京都市に提案・・・・・・・・	6
シリーズ「私の介護体験」／9月、10月市民講座の案内・・・・・・・・	7
会員リレーえっせい／シルバー川柳／新入会員紹介／編集後記・・・・・・・・	8

半歩、前へ！ かかわる会の新しいかたち。

前号の会報で、総会の内容を紹介しましたが、その中で2025年度の事業計画は、「提言された中期計画を踏まえ、段階的に改革を進めていく」と記しています。

中期計画の具体化はこれからですが、その主旨を先取りして、今回組織のかたちを以下のように変えました。

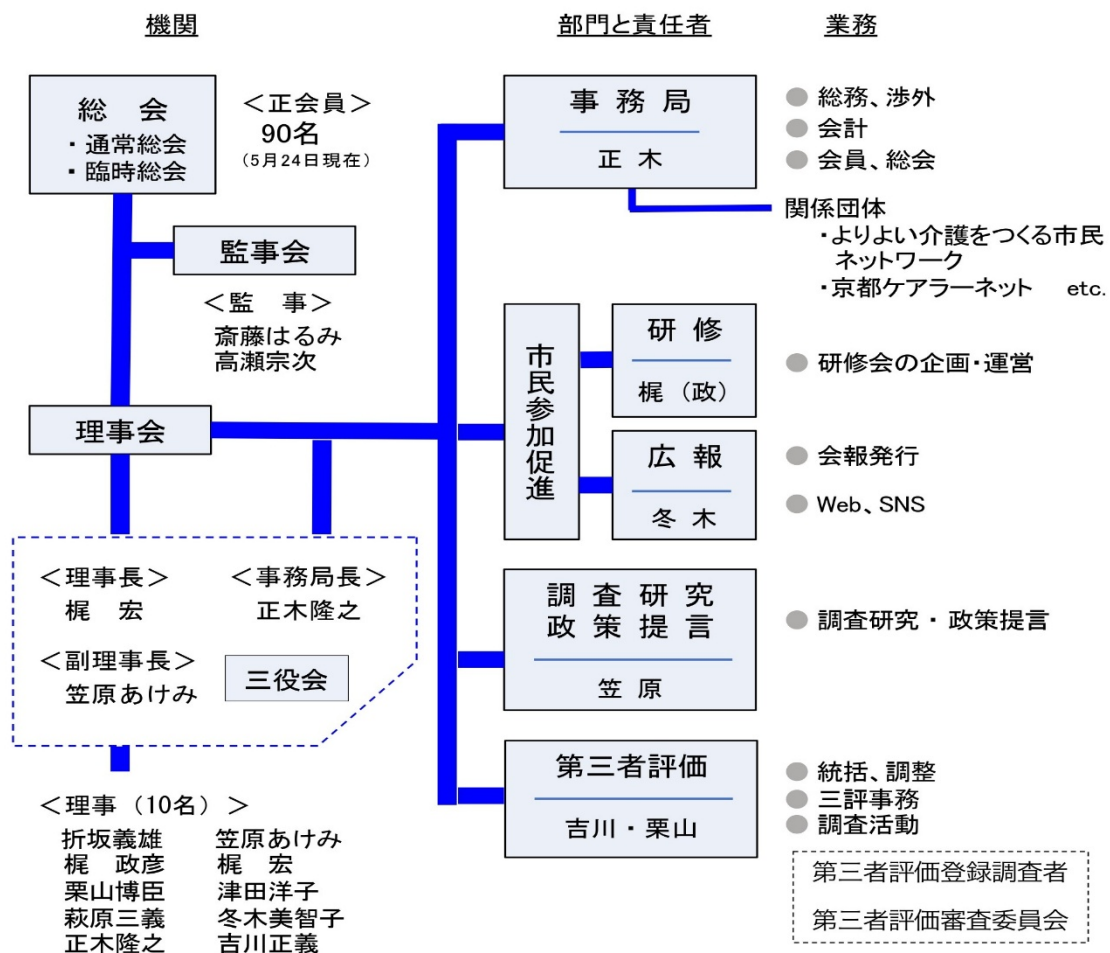
1. 独立していた「研修」と「広報」という事業の枠組を、今回、「市民参加促進」という上位概念で括りました。将来的には共通する目標のもとで一体化していくことを示唆しています。

2. 従来の「調査研究」という事業枠組を「調査研究・政策提言」に変更しました。調査研究活動を制度改革のためのツールとして活かし、アドボカシーにつなげていこうと考えています。

3. 従来の組織図にあった担当者の名前が今回から記されていません。かかわる会の活動をバージョンアップするには、理事だけではなく、会員の事業参画が不可欠です。今年度はその受け皿を作っていこうと考えています。

新生かかわる会のために、みなさんどうぞ半歩前へお進みください。

きょうと介護保険にかかわる会 2025年度 組織図



長年福祉行政に携わって思うこと～朝日訴訟に学ぶ～

第 145 回 研修 報告

日 時：7 月 26 日（土） 13：30～16：30
会 場：ひと・まち交流館 京都 第 1・2 会議室
講 師：中川 慶子さん
（きょうと介護保険にかかわる会 前副理事長）
参加者： 31 名



中川さんは 2009 年から当会理事、2012 年からは当会副理事長として長年にわたり活躍してられました。理事就任時から研修会担当として、講師を見つけ、依頼し、当日の研修会を運営するというたいへんな作業を繰り返してきてくださいました。今回はご本人に講師として演台に立っていただきました。

●福祉にかかわった原点と経歴

案内をしていたタイトルに「朝日訴訟に学ぶ」を追加した。朝日訴訟とは 1957 年、重度の結核患者の朝日茂さんが、生活保護（日用品費）の基準が低すぎる、憲法 25 条で保障された生存権を侵害していると国を訴えたものだ。生存権保障の最初の裁判で、人間裁判とも呼ばれた。1 審で勝訴、2 審で敗訴、3 審は本人が亡くなったため訴訟が終了になってしまったが、社会保障制度の改善を促進する運動へと発展していった。朝日訴訟で学んだことは、私のケースワーカーとしての仕事の支えとなった。

1963 年、当時としてはまだ珍しかった社会福祉学科を卒業し、京都市の福祉職として入庁。上京民生安定所（当時の呼称）を振り出しに 22 歳から 41 歳までの 19 年間を福祉事務所でケースワーカー（生活保護現業員）を、9 年後に福祉事務所所長に、1996 年一般行政職の部長に就任。2000 年に 37 年間の公務員生活を終了して京都ノートルダム女子大学で教鞭を執ることになった。

●生活保護業務の実際

「健康で文化的な最低限度の生活を保障する」その第一線が福祉事務所だった。生活に課題のある人達との関わりは社会問題との関わりでもあると認識。柔よく剛を制す精神で働き、話を最後までよく聞き、生活保護制度をどう活

かしていくか一人一人を大切に考える。昇任は気にしない（当時上級職でも女性の係長はいなかった）。勉強の機会にはできるだけ参加。子ども 3 人の子育てもあり時間が限られていたが、朝日訴訟の勉強会にも出かけた。アドボカシー（代弁、権利擁護）、現場からの発信を心がけた。とにかく毎日忙しく、指に自転車ダコができるほどいつも自転車でかけずり回っていた。生活保護は申請から諸調査をして 14 日以内に決定。担当件数の標準は 80 世帯だが、100 件を超えることは普通にあった。

●かかわったケースで思い出深いもの

19 年間だからたくさんあるが、社会の縮図の中での仕事、困難ながらもできる限り一つ一つのケースに向き合い自立への支援をした。

難病重度障害の女性：歩行不可、弟世帯と同居。弟は良くしてくれるが 2 畳の部屋ではつらい、自分らしく生きたいとの思いに、どのような生活が可能かを探った。京都には彼女の病気を診断できる専門機関がなく、兵庫県立玉津リハビリセンターに日帰り受診。丁寧な対応、整った機能、的確な判定で彼女に合った施設を探すことができた。

「京都にもリハビリ病院を！」と京都市職員労働組合の機関誌に寄稿したことを思い出す。ようやく 1987 年京都リハビリセンターが開設された。しかしそのリハビリセンターも 2024 年縮小され変容して再開された。

筋萎縮性側索硬化症の男性：全身の筋肉が退化する病気で老人病院をたらい回しにされていて行くところがなく、市内の国立専門病院に相談したが、最終的に国立大阪府泉北病院に入院。「全て任せてください」という看護婦長の言葉に安堵。1 ヶ月後、微笑んで亡くなられたと連絡をもらう。

●振り返って思うこと

保護費を決めるだけではなく、生活が成り立つように支援していく仕事だった。2025年6月27日、2013～15年の物価下落のみを理由に生活保護費を大幅に引き下げたのは違法とする最高裁判決が出た。生活保護利用者へのバッシングを背景に、国が生存権を軽視したものだ。生活保護利用者へのバッシングが未だに続いているが、恥と思わず堂々と保護を受けられるようになって欲しい。生活保護という言葉にはスティグマや恩恵的な響きがあり、「生活保障法」に改正すると誰もが利用しやすい制度になるのではないかと考えている。

【参加者のアンケートより】

- 今日本当にありがとうございました。続編をお聞きしたいです。朝日訴訟、勉強なおしたいと思いました。
- この時代女性として役所として本当にご苦労が多かったと思いましたが、柔らかくしかもしっかりとした立場でかかわってこられた道、

これからもよろしくお願いします。

- 中川さんが長年福祉行政に携わられ、いろいろな話を下さった。世の中が貧困で、福祉も行き届いていない時代に大変な思いをされながら仕事をされ続けられたと感心、感動しました。
- とても良かったです。グループワークの皆で話題が沸騰したのが、生活保護行政でなくて生活保障行政にするべきということでした。

(竹山幸江 記)

中川さんの軌跡は
梶宏著
『京都市にこんな職員がいた』
に詳しく載っています。



介護保険の25年を振りかえる

～誰もが安心して使える制度をめざして～

第144回
研修
報告

日 時：6月22日（日） 13：30～16：30
会 場：ひと・まち交流館 京都 3階 第5会議室
講 師：井上ひろみ さん
(社会福祉法人七野会 理事長)
参加者： 26 名



「介護保険制度の25年を総括せよ」というお題は、どう考えても無茶ぶりである。この紆余曲折、課題山積の複雑な制度を1時間あまりで話せるものではない。

ところが、その難題を井上ひろみさんは、的確に、しかもソフトな語り口調でこなしてしまわれた。ご自身の経験から得た、制度とケアと経営という3つの視座が、複雑なこの課題を立体的にみせてくれたのだと思う。ここでは、一部しか紹介できないが、かかわる会の会員は講演動画をyoutubeで視聴することが可能。ぜひ見てほしい。(URLは事務局まで)

●制度の始まりは希望と戸惑いの中で

2000年に介護保険制度が始まったとき、私はケアマネジャーとして現場に立っていました。すべてが新しく、請求の仕組みもケアプランの立て方も手探りでしたが、「介護の社会化」や「利用者の自己決定」といった理念には確かな希望を感じていました。

ただ、現場では、利用者さんから「保険料を払っているのに、なぜさらに負担が必要なのか」と指摘されるなど、制度の矛盾に直面して困ったこともあります。制度の理念と現実のギャップは、最初からあったように思います。

●サービスが届かなくなっている

25年が経ち、制度は変化しましたが、現場から見ると「使いにくい制度」になってきたと感じます。保険料や利用者負担は増え、給付は縮小されています。とくに補足給付が厳しくなり、「お金がないから施設を出なければならぬ」というケースも見られるようになりました。

本来なら「必要な人が、必要なサービスを、必要なだけ」使える制度であるべきですが、今は「使いたくても使えない」「我慢している」人が確実に増えています。制度の形だけが整っていても、実際に使えなければ意味がありません。

●加算制度と経営のジレンマ

事業所としては加算を取らないと経営が成り立ちませんが、それを取ると利用者さんの自己負担が上がる。この矛盾に、私たちは日々悩まされています。「前と同じサービスなのに、なぜ300円高くなるの?」と聞かれたとき、制度の仕組みを一から説明しても納得は得られません。

職員を雇うためには処遇改善加算が不可欠です。でも、その仕組みを説明しながら、「ごめんね」と心の中で謝っているのが、今の私たちの現状です。

●ヘルパーが集まらない現実

深刻なのが人材不足です。特に訪問介護のヘルパーは本当に集まりません。紹介業者に30万、40万と払ってようやく採用できても、1ヶ月で辞められてしまうこともあります。処遇改善をしても、コンビニのバイトとほとんど変わらない給与では、若い人がこの仕事に魅力を感じるのには難しいのが現実です。



●テクノロジーにはできない「人の介護」

コロナ禍で ICT 機器や介護ロボットを導入しましたが、やはり「人の目」「人の手」にはかなわないと感じました。ある夜、寂しくてナースコールを繰り返す女性がいました。一緒にお茶を飲んで少し話ただけで、安心して休んでくださいました。

介護とは、こういう一人ひとりとの関わりからこそ意味があるのだと思います。テクノロジーは補完的なものであって、人を減らすための手段にはなりません。

●利用者にも職員にも希望のある制度を

私たちの施設では、重度の心不全を抱える利用者さんが「野球を見に行きたい」と願われたことがありました。職員たちが一生懸命準備し、炎天下の中、短時間の外出を実現させました。帰ってきたその方が「楽しかった、また行きたい」と言われたとき、現場の私たちも胸が熱くなりました。

制度は「使う側」だけでなく、「支える側」にとっても希望が持てるものであってほしいと、私は願っています。だからこそ、制度設計の出発点には、いつも現場の声があるべきだと強く思っています。

【参加者アンケートより】

- ・施設の現場の中からのお話しで、臨場感のある状況を聞かせていただくことができ、とてもわかりやすいご講演でした。講師はやさしいすてきな笑顔でお話しされてましたが、ゆっくり考えると 25 年目の今、とても厳しい状況にあることを感じました。
- ・介護保険制度が始まる前後の状況も含めて、現場から見た 25 年間の変化を簡潔にお話しいただき理解が深まりました。利用者本位と「経営」のはざままで悩まれ、しかし利用者の願いに寄り添う努力されていることに頭が下がります。
- ・山科区の介護者の会で「介護保険が使いにくなっている」と聴き、京都新聞朝刊の案内を見て参加しました。講師の井上さまの、現場と経営との経験を交えての話で、介護保険の25年の断面を見ることが出来たように思います。

(正木隆之+chatGPT 記)

その有料老人ホームは大丈夫？

厚生労働省老健局が実施する「有料老人ホームにおける望ましいサービス提供のあり方に関する検討会」が2025年4月から5回にわたって開催され、「これまでの議論の整理」が7月25日の介護保険部会に資料として提出された。ここで言う有料老人ホームにはサ高住の96%も該当している。

有料老人ホームというと余裕のある高齢者が入るところというイメージが今でもあるかもしれないが、住宅型では月額換算で費用が10万円未満のところが33.4%（2024年）ある。要支援・要介護になるとその介護費用が上乗せになるが、1割負担なら要介護5で約3万6千円なので総額14万円以下で入居できる。要介護度が低いとさらに安くなり、ユニット型の特養よりも手頃感がある。大都市圏を中心に有料老人ホーム・サ高住が急速に増加しているが、上記のような検討会が持たれたのは大きくは二つの問題が見逃せない状況になってきたからだ。

1. いわゆる「囲い込み」の問題

住まい部分の利益を最小（もしくは赤字）に見込み、併設事業所による介護・医療サービス部分での利益の最大化をはかるといふビジネス・モデルの施設も少なくない。介護給付費の増加という点でも問題だが、利用者にとって本当に適切なケアプランが立てられているのかという点でも問題をはらんでいる。厚労省もいよいよこの点についての改善策を探り始めたようだ。



← 資料：有料老人ホームの現状と課題・論点について（厚労省）
西村周三氏推薦。有料老人ホームの現状について詳しく記されています。ぜひご覧ください。

2. 紹介事業者の紹介手数料の問題

民間の老人ホーム検索サイトで有料老人ホームを探す人は多い。無料で資料は送ってくれるし、相談に乗って施設見学に付き添ってくれるところもある。これらの経費は紹介してもらった有料老人ホームが支払う紹介手数料で賄われている。要介護度の高い利用者（介護報酬が高く施設にとっては収益につながる）や神経難病患者等には100万円を超える高い紹介手数料が支払われるケースもあるなど、紹介事業の透明性・健全性が求められる事態になっている。

（冬木美智子 記）

すこやかアンケート項目の改善を京都市に提案

京都市では第10期（2027.4～2030.3）高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画（すこやかプラン）の基礎資料となるすこやかアンケートの準備が進んでいる。当会をはじめ5団体で構成する「よりよい介護をつくる市民ネットワーク」は、より正確に現場の実態を把握し、実効性のある施策につながるよう調査項目の改善を求める提案書を市に提出した。

主な提案は①前回から除外された居宅系事業所を調査対象に戻すこと、②希望しても利用できなかったサービスについての設問追加、などである。市側の回答は「予算上困難」というもので、前向きな姿勢は見られなかったが、限られた予算内でも工夫により調査の質を高めることは可能である。

特に深刻化する訪問介護の担い手不足は喫緊の課題であり、住民の声をすくいあげるアンケート設計が不可欠だ。今後も実効性のある計画に向けて粘り強く働きかけていきたい。（笠原あけみ 記）

介護を受ける、介護をする、そのナマの声を繋ぎます

シリーズ「私の介護体験」

NHK「かんさい熱視線」に登場

～より楽に、快適に！知られざるおむつの世界～

第 25 回

佐竹紀美子（マイケアプラン研究会会員）

昔からの知り合い「むつき庵」の浜田きよ子さんからの紹介ということで、NHK から電話がありました。おむつフィッターの日英対訳テキストを出版されたばかりだったので、その感想でも聞かれるのかと思っていたら、紙おむつの実際を取材したいということで少し驚きました。利用している当事者の夫も好奇心一杯で、応じることにしました。

忙しい日程をやりくりしながら都合3日間、新人女性ディレクターの丁寧な運びに、夫も趣味やグルメの話などで盛り上がり、リラックスして普段通りのケアぶりを見てもらえました。

本番はクルーがこられるのではなく彼女一人で撮影録音などをこなされ、深夜・早暁いつ排泄があるかわからず、ゴミ屋敷の狭い廊下の片隅でほとんど寝ずの取材整理。私は2階で、気配があると排泄介助を見てもらいました。また洗濯の様子、生ゴミ回収の日でもあり、2Lの重さや嵩

も実感してもらいました。

今までにもわが家のプライバシー丸出しのドキュメント取材経験もあるので、マ、イイカ！普通の介護実態の紹介と、浜田さんへのオマージュになればいい。

直前のNHK ホームページではタレントさんが出ているので???と思ったら浜田さんの登場が少なく、またオムツフィッター検定などにも触れられず、とても残念でした。

翌日スーパーの買い物で何人もの方から声を掛けられてビックリ。「経験者です、いい勉強になった」「全国放送せなあかん」「東北の方からNHK プラスで見たよ」「いずれ行く道、知らないことを学べた」「さっそく家族の手術後のオムツ利用に役立った」とのことです。漏れの実態ぶりから、浜田さんが実地指導に来てくださることになりました。私は検定3級所持者ですが、この機会にスキルアップです。

介護のイロハ（高齢者施設・住宅編）

～安心できる老後に備えて～

第 146 回
市民講座
案内

「自宅で最期を迎えたい」と願っていても、それが難しくなることもあります。そんなときに備えて、有料老人ホームやサ高住の違いや費用について、わかりやすくお伝えします。

日 時：9月20日（土）13：30～16：30

会 場：ひと・まち交流館 京都 3階 第5会議室

講 師：内山 貴美子さん（公益財団法人京都 SKY センター事務局次長）

（京都府高齢者情報相談センター所長）

市民が議会を動かした

～京都市ケアラー支援条例 制定のプロセスと課題～

第 147 回
市民講座
案内

昨年 11 月に施行されたケアラー支援条例制定の過程と施行後の取り組み、そしてこの条例によって何が変わるのか。制定に向けての市民活動をリードした講師から学びます。

日 時：10月18日（土）13：30～16：30

会 場：ひと・まち交流館 京都 3階 第5会議室

講 師：津止 正敏さん（立命館大学名誉教授）

（京都市ケアラー支援推進協議会会長）

会員リレーえっせい ⑪

島 節子

介護保険にかかわる会に入会して

昨年（2024年）10月に京都新聞まちかど欄を見て研修会に参加しそして入会しました。

この会は介護保険の立ち上げ時に意見を言ったり考えたりと、かかわられていたのかと思っています。

メンバーにはケースワーカーさんや役所に勤めておられた方、関連の仕事をされている方、その他たくさんの方が参加されています。特に男性の方々が生き生きと動かれているのが印象的でした。

私は現在訪問介護ヘルパーをしています。訪問介護ヘルパーは腰痛や膝痛が問題でなく、ご利用者の気持ちに寄り添う、大層に言えばご利用者の人生にかかわる。その気持ちがなければ続けられないことだと思います。

ヘルパーを始めた頃は、出会いのうれしさ、学ぶ事の大切さを痛感し、とても楽しく過ごしていました。でも75才になり体力が衰えてくると自身がわがままになり、寄り添う心が時に消

えてしまうようになります。ああこれではだめだと自身を諫めて、私の好きなバイスティックの7原則(※)を思い起こします。

今、訪問介護ヘルパーは70才代がたくさんいます。もう数年したら本当に訪問介護が回らなくなると思います。報酬の問題でなく体力の問題です。若いヘルパーは施設に行くと思います。

その方が仲間もいるし働きやすいので。

先日同年代の3人で、「自分たちが頼みたいときヘルパーはいないね」と話し、「そうだ！ヘルパーを頼まない人生を送ろう。体力・気力を維持して自分で出来る事をして楽しもう」と笑い合いました。

もちろん皆それが理想で、そうすることに越したことはないとわかっているのですが。

この会で楽しく学び、人との繋がりを大切に過ごしていきたいと思っています。

※バイスティックの7原則

- ①個別化 ②意図的な感情表出 ③統制された情緒的関与
④受容 ⑤非審判的態度 ⑥自己決定 ⑦秘密保持



暑い夏が続いている。日本は温帯から亜熱帯に変わってしまったのか？しかしこの暑さは日本だけではなく、ヨーロッパでもそうらしい。いよいよこの地球は本格的な気候変動期に突入したのか？
日本沈没という映画があった。小松左京氏のSF大作をもとにした映画だが、今まさに我々は現実には大規模な環境崩壊を経験しているのかもしれない。
私は地球温暖化についてはいささか懐疑的だった。むしろ寒冷化の過程での間氷期ではないかとすら思っていた。しかし、現在の温暖化は人為的な温室効果ガスの排出が主な原因であることは科学的に明らかとのことである。
と言いながら今日も朝からクーラーをかけている。果たしてこの電気は再生可能エネルギーで作られているのだろうか？

(Y)

編集後記

新入会員紹介

中島周子さん（6月入会）
石原一恵さん（7月入会）

会員募集中
詳しくは下記のQRコードからどうぞ



シルバー川柳

クアマネをもてなしあとで寝込む祖母
飼犬が徘徊防止に付いて来る
来てやった貰ってやったで五十年
出典：（公社）全国有料老人ホーム協会